

地域日本語教室における交流型日本語活動についての評価 — 白山市国際交流サロンでの活動から —

横田 隆志*

Evaluating Interactive Style Japanese Activities in Community-based Japanese Language Classes

Takashi Yokota*

Received December 9, 2013

Abstract

This study aims at evaluating the interactive style Japanese language activities carried out at the Hakusan City International Exchange Salon and the circumstances leading to its introduction, a report on its implementation and an evaluation of the program.

The purpose of the activity is for local Japanese people and foreigners to exchange ideas in the Japanese language. Hakusan City has carried out this activity since 2012 under the name of “Waiwai Café” on a Sunday and Thursday each month.

A survey was carried out to report on the activities carried out by the participating supporters and learners and what they thought about the activities. As a result of the research, it was found that both the language supporters and learners positively evaluated the program and enjoyed the activities.

0 はじめに

交流型の日本語活動は、教室で参加者たちが交流しながら自分自身のことを開示し、表現し合う「交流型言語教室活動」（家根橋 2011）や日本語教室に集う外国人参加者と日本人ボランティアが対等なヨコの関係で日本語を使ったコミュニケーションをする「対話中心の活動」（御館他 2010）と定義されている。学校で行われている教師と生徒の関係で行われる教育ではなく、ある地域に住んでいる日本人と外国人が交流することが目的の活動である。このような活動は地域の日本語教室では増えている。

白山市国際交流サロンでも2012年4月から交流型の日本語活動を取り入れた。毎回、メンバーは入れ替わるものの交流型の日本語活動は面白いと感じているサポーターも徐々に増えている。しかし、交流型の日本語活動に対しネガティブな印象を持つサポーターもいた。そのために、交流型の日本語活動には参加しないで、従来の教師主体の授業のみを行うサポーターもいる。また、実際に参加してみたものの「何をしたら良いのかが分からない」「ただのおしゃ

*国際交流センター International Exchange Center

べりだった」という意見もあった。学習者についても毎回参加している学習者だけではなく、一度参加した後に来なくなってしまう学習者もいた。

そこで、本研究では、これまでの交流型日本語活動についての研究を概観し、白山市国際交流サロンで行った「交流型日本語活動」について導入までの経緯、実践報告をし、2012年度に行った交流型日本語活動についてのプログラムの評価を行う。そのため、まず、交流型の日本語活動とはどんなものかをこれまでの研究を踏まえ定義する。そして、白山市で行った交流型日本語活動はどんな特徴があり、どのような目的で行ったかの紹介をする。そして、最後に、実際に行った交流型日本語活動について、日本語サポーターはどのように感じているのか、参加した外国人はこの活動についてどのように思っているのかを質問紙等で明らかにし、交流型の日本語活動についての評価を分析する。

1 地域での交流型日本語活動

近年、日本語教育、特に地域日本語活動において、「対話型」、「交流型」、「おしゃべり型」など呼び方は異なるが、従来の「教室型」の日本語教育に対抗する日本語活動が増加している。「教室型」の日本語教育は日本語学校や大学の留学生センター等で行われてきた教育で、学習者は文法事項を単純なものから複雑なものへと順番に学び、それによって日本語を学習する教育スタイルである。このような教授法は、学校等へ毎日通い、ある期間で日本語を学習しようとする学習者のスタイルにはある程度適している。

しかしながら、地域で生活をしている日本語学習者には適していない。なぜならば、地域での日本語活動に参加する学習者の特徴は学校に通うことのできる学習者とは異なるからである。地域での日本語教室に通っている学習者の特徴としては、①学習者のニーズは緊急性があり、多様である ②学習者の生活が中心である ③学習時間が決められていなく、少ない の3つである。学習者は目標言語である日本語が話されている日本で生活をしているために「今」必要なことと従来の教科書での導入部分には大きな乖離が見られる。「後で必要となる」ことから学ぶのではなく、今すぐに使用する日本語教育が必要である。また、日本語習得を最終的な目標とする学習者だけではなく、「とりあえず現在の生活に必要な日本語を学びたい」、「会社の中でコミュニケーションが取れる日本語を学びたい」などのニーズにも多様性がある。彼らにとっての中心は「日々の生活」であり、日本語の学習も休日や仕事の後などの場合が多い。

また、教師に関しても、学校型では専門的に日本語教育について学んだことのある人が仕事として日本語を教えている。それに対し、地域の日本語活動は地域に外国人が増加したときに、ボランティアが最初に立ちあがり、日本語を教え始めたのが最初だった（御館他 2010）。そのようなボランティアで日本語教育に関わる人が始めた活動が地域での日本語活動である。そのなかで、試行錯誤が繰り返され、ボランティアが中心となり、日本語学習者に日本語を教えているのが現状である。

このような背景から地域での日本語活動は「交流型」の日本語活動がメインとなっており、米勢（2010）などによって日本語活動の提案やその実践報告が多くなされている。また、それらの実践を通じて、林（1994）、縫部（1998）、中村他（2005）、むさしの参加型学習実践研究会（2005）、春原他（2009）、米勢他（2011）などが交流型の日本語活動として、教材化している。

一方、交流型日本語教室活動は、家根橋（2011）が述べているように、交流型教室活動は日本語習得以外の要素が強く反映されていて、言語学習としての側面を不明慮にし、単なる楽しみのための活動、言語教育以外の活動と考えられがちである。それにより、ボランティア側か

らも、学習者側からも、交流型の日本語教室活動は「ただのおしゃべりの場」として認識されやすい。また、日本語母語話者もおしゃべりになってしまわないように、従来の教える日本語教育を活動中に行ってしまうボランティアもいることが問題視されている。

2 白山市国際交流サロンでの交流型日本語活動

白山市には約700名の外国人が住んでいて、日本語学習ができる国際交流サロン¹⁾には月に延べ人数で200人が訪れている（白山市国際交流サロン 2013）。

白山市国際交流協会では2012年度から「部会制」を導入し、協会内に5つの事業部会を設け、協会員が主体的に協会事業に参画するシステムを作った。日本語教育に関しても日本語部会が中心となり、2012年度の日本語教育についてのプログラムを作成し、実行することになった。また、2011年8月から10月にかけて石川県国際交流協会の日本語ワークショップ・出前講座で「交流型日本語クラスの試み」や「交流型日本語教室の指導法とワークショップ」を行い、多くのサポーター²⁾が交流型の日本語活動の体験をした。このような活動を通じて、交流型の日本語活動を理解したうえで、2012年度から交流型日本語活動「わいわいカフェ」を日曜クラス・平日クラスで毎月1回実践してきた³⁾。国際交流サロンでは、交流型の日本語活動を「わいわいカフェ」と名付け、一か月に2回行った（金曜日の午前・日曜日の午後）。毎回、4つのグループに学習者、サポーターが分かれ、テーマについてのワークシートを使用し、90分の交流型の日本語活動を行った。

「わいわいカフェ」は名前のとおり、従来の教室にはない、飲み物やスナックを持ちこんで、よりリラックスして、会話そのものを楽しむ活動として行った。テーマ、参加人数は以下のとおりである。

表1 わいわいカフェの内容と参加人数

実施月	テーマ	日曜クラス		平日クラス	
		サポーター	学習者	サポーター	学習者
2012. 4	お弁当			3	4
2012. 5	買い物	6	9	4	2
2012. 6	住居			5	5
2012. 7	方言	7	8	8	6
2012. 8	恋愛	6	5	6	4
2012. 9	美容室	5	14	5	5
2012. 10	スポーツ	4	8	4	2
2012. 11	私の○○	7	15	5	3
2012. 12	パーティレシピ	5	13	7	5
2013. 1	今年は…	8	11	5	3
2013. 2	健康	8	9	6	4
2013. 3	旅行	1	4	4	6



図1 わいわいカフェの様子

「わいわいカフェ」では、毎回、学習の身近なものをテーマに選び、そのテーマから日本人サポーターと日本語学習者で作ったグループで自由に会話を行った。その際に、分からなければ、辞書を使う、隣の人に聞く、サポーターに学習者の母語で尋ねるなど様々な戦略を用いて会話することを目的とした。また、交流型は「ただのおしゃべり」になりやすい、日本語ボランティアが教えたがる、という欠点を克服するために次の3つの点をボランティアに意識してもらった。これは石川県（2011）の研修で行ったもので、これにより、わいわいカフェが単なるおしゃべりではなく、日本語を使用して会話をする活動になった。

- ① 文法は体系の積み上げではなく、場面にあった語彙、表現のセットとして形式を提示
- ② 場面に即したコミュニケーションに必要な音の知識と声を聞かせる
- ③ 活動後に達成感を味あわせる

地域の日本語活動に参加する学習者は、実際に地域での生活を行っている。言語学習場面と言語使用場面を一致させ、各学習者が実際の場面において必要とされるものから学習をしていく必要がある。そのため、文法学習等は積み上げで提示していくのではなく、学習者が発話したもの、発話したいことをどのように言えばいいのかをサポーターは助けた。また、達成感は、学習者自身が発話したいものを上手に発話することにより学習の達成感を味あわせることができる。そのため、テーマは暫定的なものであり、会話の中で変化していくことも認め、クラスの最後には文章にしたり、みんなの前で発表したりした。

3 プログラム評価

本プログラムである「わいわいカフェ」を評価するには、まず、本プログラムの目的を明らかにし、その目的が達成できたかを評価する必要がある。しかしながら、学習者は各学習者の目的があり、それぞれが異なった目標を設定している。そこで、今回はまず、学習者のニーズ調査を行い、学習はどんなことを日本語教室に求めているかを明らかにする。そして、交流型のクラス活動をどのように考えているか、交流型の日本語活動について質問紙による意識調査を学習者と日本語サポーターの2つの立場から行った。

調査対象は、白山市国際交流サロンで日本語を学んでいる学習者とそこに携わっている日本語サポーターである。今回は2013年4月～5月に国際交流サロンに来た学習者とサポーターにアンケートを回答してもらった。回答人数は、学習者27名、サポーター15名だった。

(1) 学習者のニーズ

学習者のニーズについては、日本語学習の必要性、必要な場面、日本語を使用する相手、必要としている日本語の能力の主に4つの項目に対しての調査を行った。回答の集計結果を以下の表に掲げる。

表2 日本語の必要性

	必要	必要ない
日本語は必要か	27	0

表3 必要な場面（複数回答）

仕事	19
近所	18
学校／保育所	9
店	12
家庭	7
その他	2 (病院)

表4 誰と日本語で話をするか（複数回答）

家族	7
日本語の先生	8
子供の先生	1
同僚	12
友人	8
近所の人	3

表5 必要な能力（複数回答）

話す	23
聞く	21
読む	24
書く	17

日本語の必要性については、全ての学習者が「日本語を必要」と感じている。これは国際交流サロンで日本語を学習するのは学習者自身が必要あると考えて、休日などを使って学習しているからであろう。日本語学習の動機は非常に高い。また、必要な場面は、仕事や近所の人との交流をする際に日本語が必要であると感じている学習が多いということが分かった。つまり、日々の生活中で、今まさに日本語は必要なものなのである。これは地域で日本語を学ぶ学習者の特徴の一つと言えるだろう。そして、日本語を話す相手は家族、日本語の先生、学校の先生、同僚、友人、近所の人であるということが分かった。仕事場や近所で日本語を使つてのコミュニケーションが日々行われている。しかし、日本語の先生というのは教室の中での会話のことを指しているので、教室外での日本語使用が少ない学習もいる。これは、国際交流サロンでは研修生も日本語を学んでおり、彼らは普段の業務で日本語を使用しない業務を担当している場合が多いからであろう。

また、必要な能力は「話す」「聞く」と多くの学習者は答えたが、「読む」ことも必要と考える学習者も多かった。日本語で生活を行う上で、読む活動も必要と感じている学習が多いのは少し意外であった。しかし、日本で生活をする際に日本語を読むという活動は実際に非常に多いのかもしれない。日本人配偶者の場合で子供がいると学校や幼稚園などからの文書もあり、それを「読む」という活動は日常的で、生活において必要と感じてことはある。

学習者のニーズは、これからどのようになりたいかというよりは、現在必要と感じていることが直接反映されている。日々の生活でサバイバル的に身につけている日本語も多く、それをどの

ようにステップアップするかが地域での日本語活動に求められているように思われる。

(2) 交流型日本語活動について (学習者)

国際交流サロンで日本語を学んでいる学習者に対し、交流型日本語活動への参加、面白さ、役割などについての調査を行った。結果は以下のとおりである。

表6 交流型活動への参加 (27人)

	はい	いいえ
参加したことがあるか	11	16

表7 交流型の日本語活動の面白さ (11人)

	はい	いいえ
交流型の活動は面白い	10	1

表8 面白さの理由 (10人)

リラックスしながら勉強ができる	2
みんなで話ができる	4
他の国の人と話ができる	2
話題が豊富	2

表9 交流型の役割 (10人)

	はい	いいえ
交流型は役に立つ	11	10

表10 役に立つ理由

方言が分かる
少ないので発音も直してくれる
聞く活動が多い
質問がしやすい

表11 参加しなかった理由 (複数回答)

知らなかった	7
時間が合わない	11

表12 今後の参加

	はい	いいえ	わからない
今後、交流型日本語活動に参加したいか	9	4	1

交流型の日本語活動については、「参加したことがある」学習者は意外にも少なく、11名だった。半数以上(16名)の学習者は交流型に参加したことがなかった。参加したことがある学習者は交流型の日本語活動を面白いと感じている。理由は、「他の国の人と話ができる」「リラックスして話ができる」「みんなで話ができる」や「話題が豊富である」という意見だった。また、幅広いテーマで他の国の人や日本語母語話者と会話できる喜び、授業のような緊張がないリラッ

クスした雰囲気での活動が学習に役に立っているように思われる。そして、交流型の日本語活動に参加した全ての学習者はこのような日本語活動は「日本語の能力の向上に役に立つ」「今後も参加したい」と感じている。一方、参加したことがない学習者は「時間が合わない」「知らなかった」という理由で参加してないだけで、「今後参加しますか」という質問の回答には「はい」が9名、「いいえ」が4名、「わからない」が1名と「時間が合えば参加したい」という学習者がいた。「参加しない」と答えた理由は、「時間が合わないから」という答えで、交流型に興味がないためではなかった。また、「わからない」と答えた学習者も「時間が合うかどうかわからないから」という理由だった。交流型の日本語活動はリピーターが多く、一度参加した学習者が引き続き参加しているようである。

交流型の日本語活動については、これまで参加したことのない学習者にも、参加したことのある学習者にも概ね好評であるように思える。

(3) 交流型の日本語活動について (サポーター)

サポーターが従来型の日本語活動とは違う交流型に参加し、感じたこと、また、今後の参加などについての調査を行った。その回答の結果を以下に掲げる。

表13 交流型日本語活動に対する興味 (15人)

	はい	いいえ	未回答
交流型の日本語活動に興味はあるか	12	0	3

表14 興味がある理由 (12人)

色々な人と話ができる
会話に出会いの楽しみがある
地域の日本語クラスにはこのスタイルが合っていると思うから
自分のことを話せるから
交流を目的とした教室に興味がある
新しい知識の習得のため
実生活に直結した日本語だから

表15 交流型の日本語活動への参加 (15人)

	はい	いいえ
交流型の日本語活動に参加したことはあるか	13	2

表16 参加回数 (13人)

1回	1
2回	3
3回	3
5回	2
7回	1
10回	1
15回	1
20回	1

表17 参加した感想

新しく得た知識があった
言いたいことが話せる
上手な人が中心になってしまう
日本語を分かりやすい表現に変えないといけない
文法の知識も必要だ
学習者のニーズを探り当てるのが難しい
いろいろな人に会えるのが面白い
ただのおしゃべりの場だった
学習者が生き生きとしていた
初心者には難しい
レベル分けが必要
学習者の言い間違いを直してしまう
楽しかった

交流型日本語活動に「興味がある」と答えたサポーターは12名、「わからない」と答えたサポーターは3名だった。交流型に対する興味は「色々な人と話しができるから」「会話に出会いの楽しみがある」など、学習が感じ出ている交流型の日本語活動の興味と一致している。また、日本語の授業とは違い、「生活に直結している」と考えているサポーターもいた。これは交流型の日本語活動の目的であり、多くのサポーターに体験してもらいたい。従来型の文法積み上げ型だけでなく、新しい日本語教育としての日本語教室活動を体験できるので興味があるという理由で興味があると感じているサポーターもいることが分かった。また、交流型の日本語活動には12人のサポーターが参加した経験があり、その回数は1回～20回までと幅広く分かれていて、10回以上も参加しているサポーターが3人もいた。参加した感想については、「言いたいことが話せる」「色々な人に会えるのが面白い」とサポーター自身がよかったと感じるものと「学習者が生き生きとしていた」と学習者の立場としても良いと感じているものがあった。また、交流型の日本語活動は、学習者からの質問等に事前に準備ができず、その場で学習者に対応するために、「難しい」と感じているサポーターがいることも分かった。

交流型の日本語活動に参加したことがない2人の理由は、「都合が悪い」「年齢的に新しいものをやりたくない」という理由であった。時間的な制約と日本語ボランティアのビリーフに関わることだった。

この結果から、実際に交流型の日本語活動に参加し、今までにない新しい活動に戸惑いながらも楽しみながら試行錯誤している様子が分かる。

4 まとめ

今回、交流型の日本語活動を始めて1年が経過し、そのプログラムを学習者のニーズ、交流型の日本語活動に対する学習者の意識、交流型の日本語活動に対するサポーターの意識調査を通じて評価を行った。交流型の日本語活動を始めたころには、「難しい」「ただのおしゃべり」といったマイナスの意見を聞くことも多かったが、今回の調査により、交流型の日本語活動は学習者のニーズにも合っており、交流型日本語活動について、学習者もサポーターも全体的には良い印象を持ちながら参加し、楽しみながら活動を行っていることが分かる。

ただ、学習者のニーズから「読む」能力が生活で必要と感じている学習が多かったことが明らか

かになった。交流型では会話が中心となり、読む活動は取り入れていなかった。また、交流型の日本語活動は現在一カ月に2回（平日の昼間・日曜の昼間）で都合が合わない学習者が多く、今後はクラスを増やす必要があるかを検討しなければならない。サポーターの意見からは交流型には興味があり、参加しているので、今後は交流型の日本語活動の内容や方法についての研修等が必要ではないかと感じた。また、交流型の日本語活動が「ただのおしゃべりの場」にならないためのサポーターの研修も必要な事が分かった。確かに、サポーターも会話をするグループの一員ではあるが、グループ内の発話をコントロールする役割も担わなくてはならない。そのようなコントロールや学習者の発話に対してのフィードバックなどを交流型の日本語活動に参加したサポーター同士の交流によって意見の交換が行う場が必要であると感じた。

交流型の日本語活動は従来型の文法積み上げ型の教授法と対立して考えられがちである。しかしながら、どちらも学習者が日本語を習得できるようにサポートすることには相違ないと思われる。ただ、地域で生活をする学習者と学校で学習する学習者には違いがあり、それぞれの特徴から日本語を学ぶ方法を探求していく必要がある。そのなかでの交流型の日本語活動は地域での日本語には非常によく適した方法である。今後はその方法についての研究も必要である。また、地域での日本語クラスは学校ではないので来なくなってしまった学習者もあり、そのような学習者にはアンケート調査を行えなかった。今後は毎回の活動の後にアンケート調査を行い、活動について改善していく必要があるだろう。

注

- 1) 白山市国際交流サロンは、白山市国際交流協会が運営している。市民と在住外国人が相互理解し交流する場や多文化に触れ合う機会を提供することを目的として、2002年12月創設された。
- 2) 日本語ボランティアを白山市国際交流協会では「サポーター」と呼んでいる。
- 3) 平日クラスは日本人の配偶者、日曜クラスは研修生の参加が多い。

参考文献

- 石川県国際交流協会（2012）『「交流型授業」で達成感を得るために』I F I E
- 岡崎・西口・山田編（2003）『人間主義の日本語教育』凡人社
- 御館久里他（2010）『にほんごボランティア手帖』凡人社
- 鎌田倫子（2006）「『杉谷キャンパス日本語コース』のプログラム評価の試み」『J L A S』Vol. 34
- 中村律子・浅見かおり他（2005）『人と人をつなぐ日本語クラスアクティビティ50』アスク
- 縫部義憲（1999）『ホリスティック第二言語教育とそのカリキュラムデザインに関する研究』博士論文、広島大学
- 春原憲一郎監修（2004）『にほんご宝船』アスク
- 春原憲一郎・谷啓子監修（2009）『こども日本語宝島』アスク
- 林伸一・森泉朋子・斎木ゆかり（1994-1995）「グループで学ぶ日本語」『月刊日本語』アルク
- むさしの参加型学習実践研究会（2005）『やってみよう参加型学習』スリーエーネットワーク
- 家根橋（2011）「交流型言語教室活動の理論と可能性」『東亜大紀要（14）』東亜大学
- 米勢治子編著（2011）『にほんごボランティア手帳』凡人社
- 米勢・横内・久澄（2010）「地域日本語教室をつなぐコーディネータの役割と効果」『2010年日本語教育学会春季大会予稿集』
- 李徳奉（2005）「日本語教授法としての『交流の位置づけ』」『第5回日本語教育国際フォーラム要録』
- 白山市国際交流サロン（<http://www.asagaotv.ne.jp/~misalon/>）（2013年11月5日）

「交流型日本語教室」(わいわいカフェ) についてのアンケート調査

男性・女性 白山市国際交流サロン歴 _____ 年

1 交流型の日本語教室に興味はありますか。理由を教えてください。

はい・いいえ

2 交流型の日本語教室についてどんなものか知っていますか。

はい・いいえ

3 交流型の日本語教室の研修(新サポーター研修・石川県国際交流協会の講座等)に参加したことがありますか。参加された方は感想を教えてください。

はい・いいえ

4 交流型の日本語教室(わいわいカフェ)に参加したことがありますか。

はい・いいえ (「はい」と答えた方は**5**へ 「いいえ」と答えた方は**8**へ)

5 はいと答えた方は何回参加しましたか。

_____回

6 感想を教えてください。(良い点や教えるのに難しい点など)

7 今後も参加したいと思えますか。理由を教えてください。
(10へ)

8 どうして参加しませんでしたか。理由を教えてください。

9 今後参加してみようと思えますか。理由を教えてください。

10 交流型の日本語教室についてご意見・感想があればご自由に書いてください。

ご協力ありがとうございました。

わいわいカフェについて

1 わいわいカフェに参加したことがありますか。

はい / いいえ (はいと答えた方は2へ いいえと答えた方は3へ)

2 わいわいカフェは面白いですか。

はい / いいえ

どうしてですか。

わいわいカフェは日本語能力の向上に役に立ちますか。

はい / いいえ

どんなところが役に立ちますか。(どのようなところが役にたちませんか)

これからもうわいわいカフェに参加したいですか。

はい / いいえ

3 どうしてわいわいカフェに参加したことはありませんか。

知らないから	はい/いいえ
時間がないから	はい/いいえ
興味がないから	はい/いいえ
日本語能力の向上に役に立たないから	はい/いいえ
その他 ()	

今後、わいわいカフェに参加してみたいですか。どうしてですか。

はい / いいえ

ご協力ありがとうございました。